

# 石積み職人 — 栗田純司 [前編]

比叡山麓の町・坂本を起源とする  
異色の技能集団「穴太衆」。

戦乱の絶えなかった安土桃山時代以降、

日本の城郭建築に不可欠な

石積み職人として重用された。

その穴太流を継承する十四代目の職人、

栗田純司に「穴太積み」の起源と

職人として一人前になるまでの経歴を聞いた。



自ら手がけた慈眼堂の石垣の前で。一見不規則な石積みだが、穴太の技の粋が集められている。



穴太積みの石垣が連なる坂本の街並み

## 比叡山麓の「職人集団」

琵琶湖の西側、京都府と滋賀県の境にまたがる標高八四八の山、比叡山。言わずと知れた天台宗の総本山であり、多くの寺院や神社を抱えるこの山の滋賀県側に、坂本という町がある。延暦寺・日吉大社の門前町として古くから栄えたこの一帯は、日本の建築史上に名を残す職人集団の拠点でもあった。

職人集団の名は「穴太衆」。石を積んで石垣をつくる匠の集まりで、古くは古墳時代に端を発するともいわれ、険しい山の頂にある延暦寺の土留め工事も手掛けたという。その「穴太衆」の技術を唯一現代に受け継ぐ栗田家の十四代目の当主で、現在は栗田建設の会長の職にある栗田純司は語る。

「初代は享保二（一七一七）年。そのころに阿波（現在の徳島県）からここに移り住んできたらしいです。当時は『享保の改革』で幕府も台所が苦しかったから、きつと仕事が減って戻って来たんじゃないかと思っています」

## 織田信長をも感心させた「穴太積み」

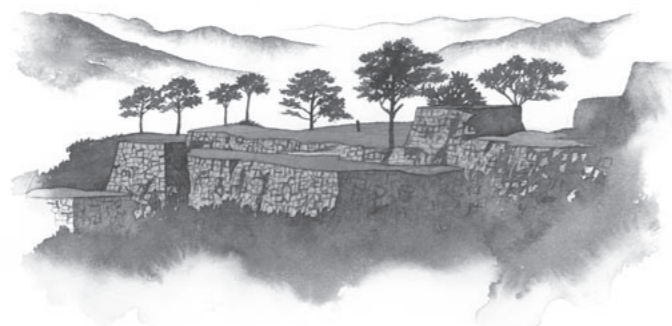
「この『穴太積み』が広く知られるようになったきっかけは、信長なんです。有名な『比叡山焼き討ち』の時に、配下の丹羽長秀が焼き払った後を檢分に来て、頑丈な石垣があることを信長に進言したらしい。それで五年後に安土城を築城する際に、穴太衆も含めたこのあたりの石工をたくさん呼んで石垣を築かせた、という記録が残ってます」

完成した安土城は、規模・構造・容姿ともそれまでの山城とは明らかに一線を画する、言わば信長の天下布武の象徴であり、さらには近世以降の日本の城郭の模範ともなった名城。その土台となる石垣を普請した穴太衆の名も、一躍全国に知れ渡ることとなった。

「そやから、われわれ穴太を継ぐもんは、信長に感謝してらんです。いろいろ酷いこともやっただかも知れんけど、穴太の技が世に出たのは、



あわた・じゅんじ●1940(昭和15)年、滋賀県生まれ。父・栗田万喜三は穴太積みの人間国宝。大学卒業後から父の下で修業する一方、1964(昭和39)年に会社(栗田建設)を設立。現在は15代目に当たる長男・純徳に社長を譲り、文化財石垣保存技術協議会の会長も務める。2000(平成12)年に「現代の名工」に選定される。



穴太積みの石垣が残る竹田城(兵庫県朝来市)。栗田氏が復元を手がけた。

「石積み」の極意は『石の声を聴く』こと。そして、それは万事に通じる教えだった

の声を聴いた気がしたのはさらに何年も経って三三歳になってからです。安土城天守台の工事で、あれこれ試しながら『これは』っていう石を置いた時に『コトン』と音がして、あ、今、石が応えてくれたのかなあと」  
それからは石の声に従えば迷わず積めるようになり、仕事の効率も上がったうえに、さらに大きな変化もあったという。

「石の声だけじゃなしに、人の声も聴くようになりましたね。それまでは自分の意見を押し通すことが多かったんですが、みんなの話に広く耳を傾ければ風通しもよくなるし、自分が気づかされることも多い。その結果、いいものができるというわけです」  
先代の教えは、石積みのみならず仕事全般に通じる金言だったようだ。



右/「石と友達になっつもりで『どこへ行きたい?』と問いかければ積む場所は自ずと決まる」  
左/将来性を悲観し、父のやり方に反発することも多かった修業時代。「石の声を聴いた」ことが転機に。(写真: 栗田建設)

信長のおかげでもありませんから」  
その後、日本各地で戦国大名たちが、築城の際にはこぞって石垣づくりを穴太衆に依頼した。北は青森から南は鹿児島まで、この時代に建造された大小無数の城のうち実に約八割が穴太衆の手によるものだという。しかし泰平の江戸の世ともなると堅牢な城郭を築く必要はなくなり、さらに慶長二十(一六一五)年には「一国一城令」が発令されて、数多の城が廃城になった。最盛期には三百人以上いたとも言われる穴太の職人もその多くが石積み職を失って廃業・転職に追い込まれ、いつしか穴太積みは「幻の技」と称されるまでに衰退してしまっ

する関心が低く、穴太積み自体もほとんど忘れられた存在だった。改めて先行きを懸念した粟田会長は、一〇年ほど県庁に勤務してから父に教えを乞うつもりで、公務員試験に合格していた。しかしそれを知った先代は…。  
「お前、一〇年たったら何歳や。三〇過ぎてからこの仕事覚えられんと思てんのか!」と一喝。県庁からの採用通知も破り捨ててしまった。  
「自分が大学行けて言ったのにね(笑)。でもやっぱり年を取ったら雑念も入るし、素直な心も忘れる。『鉄は熱いうちに打て』やないけど、技を仕込むなら早い方がいい、ということですよ」

大学を出て職人の道へ

栗田会長の父・栗田万喜三は、十四歳から修業を始めて石積み職を磨き、人間国宝にも選ばれた叩き上げの職人。しかしその先代のもとにも、満足な仕事は来なかった。  
「高校を出る時、悩みながらも石積み職を継ぐ方に傾いていたら、親父が誰かに『息子さんを大学に行かせたら』と説得されたらしく、ある時突然『おい、お前大学行け!』ときた(笑)」  
それから猛勉強して何とか大学に入り、土木を系統的に学んだ。昭和三十八(一九六三)年に卒業したが、当時は文化財の修復や保護に對

「石の声を聴く」その真意とは…

父について修業を始めて数年、自分なりにうまくできたつもりの石積み職が先代に全く認められず、壁にぶち当たってしまった。  
「ど、どが悪いのか聞いても教えてくれません。曰く『お前は石の声を聴いとらん』と。私は最初、そんなあほな、石が口きいてたまるかいと馬鹿にしてたんですが…」  
父の積む様子を観察していると、測量して計算通りに納めようとしていた自分と違い、まるで石と対話するように自然な調子で置いていく。「なるほど、とは思いましたけど、私自身が石